

国立第二小学校既存樹木の仮移植の現状と安全対策に関する説明会 議事録

2023年8月17日(木) 19時～21時50分@西福祉館

共催：～つづく つながる～くにたちみらいの杜プロジェクト/国立市教育委員会

説明員:森田真里恵(プロジェクト共同代表)、小岩瑠理子(同)、中谷純江(同)、前田せつ子(事務局長)
矢野智徳(大地の再生技術研究所/杜の学校)、押田大助(大地の再生関東甲信越支部/中央園芸)
橋本祐幸(国立市教育委員会教育部長)、島崎健司(同教育部総務課教育施設担当課長)

森田 説明会の開催時期が遅くなったうえに、平日の遅い時間帯になってしまったことをお詫びします。最初にプロジェクト事務局から概要を、そして施工者の矢野さんから仮移植に関する説明を行い、質疑応答を受けます。

前田(事務局長/プロジェクトリーダー、資料を使つての説明)

第1期(新校舎建設)工事のエリアが資料1。二小には低灌木を除いて160～170本の木があるが、このうち100本の伐採が決まっており、ウッドチップにして新たにできる緑道に撒かれることになっていた。第1期工事では桜並木と南側の桜など約40本が伐採対象に。3月30日桜の鑑賞会の後、教育委員会との初めての話し合い。「なんとか引越させたい」と伝え、教委も「1本でも2本で、残したい気持ちは同じ」というところから急遽スタートしたプロジェクト。

伐採予定の木の樹種、樹高、幹回り、枝葉の張り等が書いてある資料2は、桜の鑑賞会で配布された資料に今回の対象樹木だけ色をつけたもの。ゴールデンウィーク4日間と5月13日の追加工事で46本を仮移植し、1本が伐採された。

5月1日、市教委と協定を結び、二小の改築マスタープランが示すコンセプトの一つ「自然とふれあい豊かな心を育てる」の具現化、実現したいイメージの一つ「樹木や芝生を大切に四季折々の自然が感じられる環境」の整備、加えて子どもたちがSDGsに関してより理解を深め、環境教育の一助とすることを目的に、改築工事全般に支障のない範囲で、伐採予定樹木を可能な限り移植した。

5月3日～6日の4日間。矢野さん、押田さんはじめ一日約50人の大地の再生の職人さん、ボランティアの方々が移植をしてくださった。クレーン車で持ち上げ、最終的には人力で微調整。東側フェンスに沿って幅3m、長さ43mのスペースに収めた。そこであれば仮置きしてもいいと改築工事の建設請負会社さんが仰ったことで実現できた。狭いエリアに入れるため、樹高は3～5m、ギリギリのところまで詰めて剪定し、重ね置きして木杭を打ち込んで安定させた。子どもたちも安全な場所で作業を手伝った。

建物の筋交のように原木丸太を仮移植した木々の支柱として渡した。最後の桜は3mくらいの根鉢を掘り起こして運んだ。作業人数はサポートスタッフ含め5/3が62名、5/4が55名、5/5が46名、5/6が45名。追加で行った5/13は18名。

費用に関しては私たちプロジェクトがクラウドファンディングやご寄付を募る形で集めている。卒業生の祖父の方やかつて務めていらした教員の方からもご支援をいただいている。

仮移植した樹木の配置図が資料3。二小内に36本。入りきらない10本は上野原に仮置きしている。

使用した支柱(原木丸太)は4mの長さを57本。木杭は根鉢周辺で目視で確認できるのが183本。東側フェンスには比重がかかることのないよう木杭とコンパネで土留を施している(土留を含めると木杭は全部で331本)。現在、仮置きした木たちは新しい芽を吹いている。既存の木とも絡む形で。既存木も元気になって胴吹きしている。大地の再生のやり方で「水脈」を通し、大地の上と下を空気と水が循環するようにしてあるためだと思う。仮移植した木々の根鉢の上には、剪定した枝葉や幹を置き、安定させる重石に。

体温よりも気温が高い猛暑日に仮移植帯に水撒きで入ると暑くない。7月23日に気温を測ってみた。14時の一番暑い時間帯に日の当たる校庭は高さ1.5mの地点で41.9℃。二松の木陰は39.0℃。仮移植帯は35.8℃。何もない校庭より6℃低い結果が出た。

今後の課題はどこに本移植するか。できる限り二小内で成長させてあげたいが、すでに植栽計画が出ている中で、市内の他の場所も含めて検討していきたい。皆さんのお力、ご意見をいただきながら協議を進めたい。2期工事では40本、3期工事では20本の伐採が決まっている。

矢野(施工者/プロジェクトリーダーを使つての説明)

工事の全体の計画含め、作業内容の責任を担当させてもらった。いま騒がれている災害含めた環境問題の中で、植物と共存しながらどう解決に向けて道を示していけるか、大事な岐路に立っている。今日は工事の内容含め、環境のこともお話しさせていただきたい。

約3mから3.5mの幅で43mの範囲になんとか40本近くを収めることができた。木の大きさ、根鉢の大きさ含めて、掘ってみないとわからない不定形の生きものを相手に、これだけのスペースの中に収めていくのは、限られた時間の中でいのちをつなぐという、業界の中でもハードルの高い工事だった。全国の大地の再生ネットワークの人たち、機械関係者の人にも集まってもらって、なんとか乗り越えることができた。

なぜ、こういうハードルの高い作業をやっていかないといけないのか。都会の中で問題になっているヒートアイランド現象、環境問題そのもの、生態系のいろんな問題と合わせて、このことが現実的に繋がれていけるかどうか、私たちの業界含めて、都市の中で関わる人社会に問われていると思う。それを一つ一つ、できることから具体的に紡ぎながら、このハードルを超えていく、現実環境問題が解決していけるような糸口、手立てになっていくための取り組みとして、今回やらせてもらった。

これだけの高木をこの短期間で移植することは、猛暑の時期であることも含めて、業界では、一般的には実行できない。でも、いのちの世界に向かってリスクを避けていたら、いのちと共にあったり、いのちからいのちが繋がれていく可能性、環境の機能を、人社会の中でうまく紡いでいけない。

今回の国立二小での移植作業は、限られたスペースの中で、基本的には一本一本を大地の地面を掘って移植することができない作業だった。掘り取られた木が地面の上に据え付けられて、重心が傾がないように、木杭と支柱で、根鉢と地上の枝葉、何本か残された既存木の力を借りて、重心バランスを取りながら呼吸を繋ぐという植栽方法。何十年も生きてきた大きな木々の力を借りて全体が支え合って重心を崩さないという「しがらみ構造」の植栽方法で出来上がっている。

それぞれの木々を、3mから5mに伐採剪定し、落とした幹から枝までをほぼ100パーセント使って、それぞれ立っている木に匹敵するぐらいの、もっと言えばそれ以上の重量を持つような枝幹の重さが、この中に、いわゆる根元に土と同じような形で、打ち込まれた木杭や支柱と合わせて、既存木の根と重心バランスを保ちながら、しがらんでいる。

私たちはいろんな木の大きさや状態に合わせて、大地の中の、根の重心を支える力、張力、そういうものを含めて、どうやれば植物の根が呼吸するのか、空気や水はどうやれば循環するのか、それを現場で繋ぎながら、こういう施工を確立してきた。土に植わってなくても、植物の有機材が9割方しがらんでいる中に、その隙間に土が入って、空気と水をつなぐ工法でも、空気や水がちゃんと循環していると、植物は一斉に発芽、発根してくる。

もう一つ、時期の問題。春夏秋冬を問わず、真夏でも真冬でも、どんな時期でも、植物の根が呼吸するとはどういう状態なのかをひたすら追ってきた。業界の中では、冬寒い時や真夏は木の移植はまずしない。土をちゃんと根につけて、根鉢を巻いて、幹を保護して、呼吸が最低限ちゃんと保たれる状態を確保したうえでないと移植は不可能、やってはならないと教えられながらやってきた。でもいまの時代は、私たちが学んできた時代とは、元環境が決定的に違う。この社会の環境変化、ニーズ、それに対応していくには、私たちが私たちが教わったことの範疇でやっていたのでは、環境に追いついていけない。それを日々現場から切実に教えられてきた。

そしてもう一つ重要なことは植物の機能。実は生態系の、生きものの呼吸を最先端で繋いでいるのは植物。大地の中の空気や水、血管である空気や水が循環する脈を一番担って、自分は動かさず脈を繋ぎ続けて、地上と地下の空気と水の大流循環、ラジエーター機能を生きもののために繋いでいる。一木一草のスクラムがあることによって、バクテリアから小動物、大動物も含めて、生物がちゃんと呼吸できる環境が保たれている。

だから、二小だけの問題ではなく、都市機能も含めて、もっと言うと、海から水源域までの世界中の流域で植物が果たしてくれている役割、及びその役割をちゃんと保全することが、地球規模、それからのいのちをつなぐ生命体のエリアの中で必要不可欠だという現実がここで見えてくる。

このことを、この現場はある意味本当に明確に見せてくれている。いのちの世界や機能を守ることが、自分たち、人、社会の環境や機能を守ること、間違いなく繋がっていている。大木を伐採して新しいいのちをそこに植えれば、数十年かかって生み出してきた循環機能をすぐ担えるのかということ、絶対に担えない。そのことがいま、CO2の問題だけでなく、都市を中心に騒がれている環境問題と密接に関係していると思う。

ミクロのもマクロも相似形。どんなに小さな植木鉢一つも、流域全体の生態系の生きもののスクラムも、実は相対的には同じ。だからこそ、ここにこれだけの植物が集結すると、ここだけはオアシスのように息がしやすい場所になっていく。いま都市でプランニングされているような流れで進んでいってしまったら、都市の環境はどうにもなくなっていく。リスクはつきもの。いろんな呼吸はどう繋がるか。でも、それを一つ一つ大事に繋いでいくと、ちゃんといのちが繋がる。

この猛暑の中、台風が直接間接にやってくるような状況になっても、このスクラムは大したものだなと思う。私たちはこのことを感覚的にも、それから知識や知恵としても、子どもたちに伝えたい。なんとしても学んでほしい。弱い部分をお互いが支え合いながら、呼吸を支え合っている。二小の移植は都市社会のマクロな社会の世界そのものを見せてくれていると思う。どんな小さな生きものたちでも、大きな生きものたちでも、みんな実は支え合っているんだということが、ここから見えてくる。

今回は、いろんな方たちと連携して、これだけの大きないのちを、救うことができていると思う。これを大事に、またこの国立の中で繋いでいくことができたなら、東京都内全体にも、一つの貴重な情報として、業界にも、そして業界を超えて各業界の環境に関わる人たちにも伝えていける貴重な情報になってくると思う。

これまで手がけた移植の実績事例の紹介を。

①仙台の宗教法人の施設。移転に伴い、敷地内の樹木が全て伐採、撤去、処分と決まっていた。コンクリート塀際、境界線ギリギリギリにある樹木の移植。どれだけ活着するかは読めなかったが。結果的に、全部、一本残らず移植できるものを移植しようということになり、やっていった。新たな場所は造成された更地のような場所。そこに、この生きものたち（木々）を植え付けながら、足らないものを仮植していった。碎石、砂利の世界で土がないところもあった。でも、有機物と石があれば、土は腐葉土として生産されてくる。この時は木杭固定だけで樹木の重心を支える施工。結果、この5~6年の間、ここでちゃんと成長して、根を張って自分のからだを支えてくれて、ここの水脈をちゃんと支えていってくれて、これだけの生きもの空間になっている。

②鎌倉の現場。これも全部が伐採されて、新しい木で新しい庭を作り変える話だった。でも、何十年もここで生きてきたのだから、なんとか活かしましょう、と。この移植をやったときは、いまよりももっと暑かった。で、こういう風に剪定をして、根を素掘りで掘って、根巻きする余裕もなかったの、幹を巻いて、あとは寒冷紗をかけて熱を防ぐ、そういう方法でやった。温度を防ぐため伐った枝を幹に巻くやり方もやった。真夏の工事にもかかわらず100パーセント根付いた。どの植木屋さんたちもみんな枯れると言ったが、ちゃんと芽を吹いて育った。

③上野原。何百万もする木をなんとか残したいと言われて農場に移植させてもらった。何処か必要なところに行くことがあったら、と。数年後、静岡の三島に自然と共にある住宅を建てる方がぜひ引き受けたいということで、据え付けた。真夏の状態でもなんとか根杭だけで止まっている。重量、重心バランスを保つような植物の根っこの機能を土と石とを合わせて組んでいくと、全体に自分の重心を支えるだけの力がそれなりに保てる。

④去年の夏に行った渋谷の小学校の隣の公園。小学校の拡張工事で全伐採になっていた。公園のお隣さんから、こういう計画になったが、少しでもそれを活かさないかと相談があって、急遽、渋谷区から請け負った業者さんにご相談した。全部で植え替えましょうということでやらせてもらった。お盆過ぎた、ちょうどいま頃。全部、二小のように、お隣さんの敷地の中にスクラム組んでお互いにしがらませて、土をほとんど使わないで仮移植した。下草類は別だが、低灌木含めて公園にあった木は全部、お隣さんの庭に、収まりきれない大きな木だけは私たちの農場の方に仮移植して、なんとか活着してくれた。この間、十分にケアできなかったこともあって2割ぐらいは枯れたが、8割はなんとか息づいてくれている。今月の末、工事が終わった校庭に再移植することになっている。

⑤兵庫県の織物工場。壊すだけだったコンクリート槽を、なんとか動物と植物の育つ家にならないと言われて、やらしてもらった。コンクリートの中に脈をつなぐ最低限の溝を掘りながら、植物を据えて、しがらみ構造を作りながら組み立てていく作業。原木丸太、移植した木含めてみんなスクラムを踏ませながら、コンクリートと一体化するような脈を作ってやれば、自然の岩盤と同じことになる。岩盤に植物がちゃんと育って森になっていく。そういうことを基本に繋いでやれば、都市空間は十分、ラジエーター機能の伴う空間に再生していける。

⑥和歌山県の温泉施設。コンクリート空間の露天風呂に、外の風とこの湯をつなぎ、自然の空気を循環する、そういう場所を作った。見た目の植栽ではなく、ラジエーター機能や空調機能を伴う植栽。いつも来てくれるお客さんたちが、風が変わった、全然違うと言ってくれた。生きものが呼吸するってこういうこと。

⑦静岡県の富士宮の病院。病院の奥さんから、息が詰まるような場所になってきたから、なんとかしてもらえませんか、と言われて、やらせてもらった工事。建物の際にコンクリートをハツって脈を入れて、それぞれの脈を繋ぐように植物を植えてやったら、みんな活着した。造園組合の人たちはみんな枯れる、無理だ、こんなスペースで植物が育つはずがない、と言った。活着したら、この植木を分けてくれた会長さんが、業界を見直さないということをやっと言ってくれるようになってきた。いま、鳥の巣とか、生きものが共有してくれるような空間になってきた。反対だった患者さんたち、職員の人たちも変わってきた。救急車が来たら邪魔になるとか、虫が出るとか、そうやってリスクの話がされていた方たちが、やってよかったと言ってくれるようになった。

⑧豊橋市の造り酒屋さんで大事にしていたヤマモモが枯れてしまったとき、なんとかならないかと言われた。この空間をちゃんと息のできる空間に変えさせてください、造り酒屋さんの麹菌がちゃんと生きる大地にさせてくださいと、やらせてもらった。いま、この老木が枯れながらも、わずか2平米ぐらいの空間に、森のような縦穴の脈を繋ぐ息づきを、地上と地下で繋いでくれている。

最後に。流域で考えたら、大地の血管にあたる脈、地上と地下の空と水の循環がちゃんと繋がってないと、災害が起きてしまう。ヒートアイランドも収まらない。人が息ができなくなるような空気になってしまっているのを変えるには、植物の機能と共存することしかないと思う。コンクリート水路などでどンドン塞がれて、失われてきている循環機能を復活させるには植物の力が最も有効で、それは手の届くところにある。脈の機能をちゃんと繋いでいくと、コンクリートの、人の便利な空間でも、なんとか循環の機能を再生していく。それが生態系。

参加者 A

孫が二小に通っている。矢野さんの環境への意識には共鳴するものがあるが、二小の木の安全性ということで今日は集まった。仮移植した木は既存木に支えられて重心を保っていると聞いた。既存木は4本。移植した木は約40本。どうやったら支えられるのか。

説明員 矢野（工事施工者/杜の学校）

既存木がちゃんと点在して、それに仮移植した木がスクラムを組んで重心を保っている。

A

それは概念的な話で既存木と絡んではいない。明らかに南東の3本は単独で立っている。地震や台風、大雨、突風が来たら通学路のほうに倒れてくるのではないか。倒木事故は擦り傷や切り傷では済まない。日本にはたくさんの倒木事故が起こっている。環境を再生できたとしても子どもたちのいのちは再生できない。非常に危険な状態に置かれていることを認識してほしい。

矢野

単独で立ってはいない。全部の木を既存木と根も含めて全部繋いでいる。一つ一つ揺すりながら強度も確認している。どこが危険なのか、逆にお聞きしたい。

A

最後にやった3本というのは時間もない中でドサクサでやられた。それまでは木の根も十分に掘っていたが、最後はブルドーザーで直接掘って、引き倒して運んで置いている。だから根鉢も小さい。プロジェクトは根鉢の大きさの記録もとっているだろうから公開してほしい。

矢野 安全性の根拠は私たちの業界での経験値含めて知恵の集結。安全ではない、というのは何を根拠に？

A

この台風6号、7号で一体何本の木が倒れたか調べたか？

矢野

それと今回のこととは問題が違う。

A

違わない。倒木は自然環境に対する我々の甘え。

矢野

倒木というのは科学的根拠がある。重心バランス。枝、幹の大きさと根鉢の大きさ。この重心バランス。

A

それは静止している場合の重心バランスであって、台風や地震はどうやってその根拠に入れるのか？

矢野

その根拠を持って、台風や地震の場合でも最低限人のいのちに関わらないよう、できる限りの作業を、限られた時間の中でやってきている。

A

そんな曖昧なことでは納得できない。2019年の台風15号は千葉県で1000本の倒木があった。埼玉県でも1000本。

矢野

その問題とここの問題は一緒ではない。

A

もちろん。でも、二小の木が倒れないという根拠には全くなならない。

参加者 B

お話の途中ですみません。少し発言しても？ Aさんは倒木が心配だから移植した木を撤去してほしいというお考えが？ 市内の業者さんが調査をされたといただいた資料にあったので、その数値を示してほしい。

A

二小の仮移植の問題は我々にとっては寝耳に水。1年半前から計画は父母会、近隣住民に説明がなされていた。工事に不必要な木は伐採すると通告があった。4月20日までそうだったのに、いきなり5月1日に協定が結ばれ、それから4日間の突貫工事。そもそも突貫工事が多くの危険性を孕んでいるというのが私の考え。こんなことを二小でやらないでほしい。毎日子どもたちが通っている通学路の傍でやることではない。根本的には撤去してほしい。しかし時間も費用もかかるだろうから、教育委員会にはまずは通学路の規制と迂回路の徹底をしてほしい。

矢野

そういうことだったら、木を植えたらどこに行っても危険になってしまう。

A

これは植えたのではない。置いてあるだけ。それも巨木。根がない。だから危険。このくらいの巨木なら7~8m根があってもいいものを切って置いてある。

矢野

それは素人判断です。

A

そうかもしれない。しかし、それが本当に安全なんだという根拠は私には理解できないし、証明もできない。

矢野

これは誰にも証明できない。

A

だから駄目なんです。いったん事故が起きたら取り返しはつかない。莫大な賠償金がかかる。工事関係者、矢野さんはその責任を負っているのか。

矢野

はい。負っています。

説明員 島崎（教育委員会 課長）

数値について、ということでお話しします。第三者の視点ということで、市内の造園業者さんに安全性について確認していただいた。その中で、造園に関しては地震、台風に関する数値的な指標はないと聞いている。ただ、移植の手法については支柱によって支えを行うのが一般的だと聞いている。

A

安全基準より前に、既存木に支えられているという説明と事実は異なっていることを認めてほしい。

説明員 前田（プロジェクト事務局長）

既存木に支えられてるといのは、市教委への報告書に出した自分の表現（既存木を支柱に～）が違ってたかもしれない。矢野さんは別の表現をしている。実際、これまでに矢野さんが移植した木は一本も倒れていない。仙台も移植後に大きな地震があった。もっと高い木が木杭だけで支えられて立っているが、倒れていない。

参加者 C

地元の業者に聞いて、業者も知見がないと言っている、と。矢野さんも実験的なやり方だと言っているわけですね。そうなったとき、業者として感覚的に大丈夫だと言っているだけなのを教委としては認めているのか。理念的に信じている人は安全だと言ひ、そうでない人は不安だと言っている。もしかしたら倒れてはこないかもしれない。でも万一倒れても大丈夫な措置をするのが行政の役割。もっと内側に場所が取れるなら、そういう措置をしなければならなかった。あがっている不安に責任もってどう対処するのか。答えられないなら不安なまま今日は終わってしまう。

前田

通学路のことはすでにお知らせを出したと聞いた。説明を。

島崎

地震、台風について具体的な数値指標がないのはお答えさせていただいた。市内業者さんからは根鉢を木杭で固定し、丸太を使って筋交のように支える方法によって強度が保てるのではないかと見解をいただいている。また、仮移植した樹木については、仮に倒木という事象があったとしても、倒れるのは校庭側ではないかと所見をいただいている。

一番南側と北側については筋交を補強する余地もあるのではないかとお話をいただき、7月23日にプロジェクトに補強工事をしてもらった。保護者の皆様には対応したことをお知らせしている。ご不安のある場合には保護者判断で通学路を変更しても大丈夫というお知らせもしている。

参加者 D

造園業者は具体的な数値を知らない。ただ、建築、構造設計などをやると地震などは重量の0.2～0.3の横力が働く。教委が中心となって外部の業者も頼ってやらないと。公共施設、二小の樹木の移植は、教委が責任もって計算して安全性を皆さんに理解してもらおうようにしてもらいたい。

前田

人工構造物とは違って造園の世界に数値がないのは扱う樹木が一本一本全部違うからだと思う。風倒木した木は重心バランスが上の方にあったり、下の方が病気で傷んでいた木。生きものだと考えた場合、単純に数値で測れるものではない。二小の樹木に関して私たちは安全だと思っている。ただ100%の安全はどの世界にもない。だから台風の前後、毎日の水やりでチェックしている。

参加者 E

重心バランスをボードに描いて説明してほしい。互いに助け合っているというのは根っこが絡まって木が助け合っているということか。

矢野

ダルマがひっくり返らないように、ダルマの丸い部分に杭を絡ませて、それぞれのダルマが杭と枝と幹でしがらんで全体が動かなくなる。凄い風が来ても、風は横に抜けていきながら、風圧でバランスを崩す状態を避けるように既存木を中心に全体が動かなくなる。傾ぐとき、それぞれの傾ぎを収めるように、それぞれの根っこが大地の中に根を張っている。それで地上の枝と根っこが大地の中で緩衝しながら風圧、水圧、土圧に耐えるようになっている。

一本の木が自立するように据えながら、さらに重心を支えるように木杭をしがらませている。木杭と枝と幹とが根っこが張ったようにしがらんでいる。それで、下の部分が全部帯のように繋が

っている。で、既存木がところどころに、深いところに根を張って、打たれた木杭と上に置かれた枝、幹と合わせてしがらんでいっている。

既存木は4本だけでなく周辺にはアカマツやヒマラヤスギがあって、それらの根っこが平面にも立体にも根をすでに張っていて、それらの根のネットワークに仮植した木たちが重心バランスを保つようにしがらんでいく。

E

風が吹いたとき、その力の中心が重心の上にあるか、下にあるかの問題だと思うが。数値的なものも出していく必要があるのでは。こないだの台風ではトラックが風で倒れた。重心が下にあるのに。

矢野

それはタイヤと道路の接点の問題。見えているところだけでなく、大地の中の根っこという重心が大事。

D

水掛け論になっている。整理した方がいい。

前田

トラックの重心と樹木の重心は全く異なるものかと。他に。

F

二小の保護者。重心とかの話をするとう時間が足りなくなる。この問題は二小の子どもたちのこと。子どもたちを外した議論はまた別だと思う。Aさんの意見もわかる。GWに突然されたことで、見た目も危険。一方で矢野さんの仰ること、今までの経験もわかる。ただ、数値など具体的なものでないとなかなか理解してもらいにくい。説明する側はそういったご意見の方にも納得いただけるものを提示すべきだと思う。逆に安全性を求める側としては、あの木々をなくしてほしい、と仰ったが、子どもたちはもう知ってしまっている。この木々が一緒に緑をつくって、支え合って安全なんだという認識で移植を見守っている以上、撤去を求めるのであれば、子どもにどう説明してフォローしていくのかを考えてほしい。

C

それは誰が言っているのか。

F

学校からお知らせをもらってくる。結局は、学校と教委があんなに自然いっぱい二小に、いきなりポンと伐採することを出してきたことに少し責任があると思っている。保護者の中で木を大切にしたい思いの強い方もたくさんいらっしゃる。今回、そういった方が声をあげてくださったと思う。それが、期間の短い中でバツとやってしまったことで、こうした声があがっている。通学路に関しては、早急にできることは、あそこは通らない、入らない、というのは、保護者から話しておくべきだと思う。

数字は出たとしても納得いかないものはいかないだろう。だから子どもたち中心に、かたや子どもたちの安全を守るため、かたや自然を守るため、子どもたちの未来をよくしていくために考えてくださっている。学校と教委がもうちょっと面と向かって話していくべき。災害だって何%の確率で起こるかわからない。それがなくてもあの木々が倒れる可能性はゼロとは言えない。そこで話し合っても答えは出ない。

反対される側は反対するだけでなくゴールを示し、プロジェクト、教委、学校側は不安を訴えている側に納得がいく説明ができればいいと思う。

とにかく、子どもたちを置いてけぼりにしないでほしい。

参加者 D

以前子ども三人を国立で育てた。台風や地震で倒れたら危ないと心配されている方もたくさんいることが理解できた。現実的な問題として東側の道路を通学路にしていることが一番問題で、そこを通行止めにするなりするのが現実的なのでは。北側にある通用門を整理して昇降口に行けるよう通路をつくったり。倒れるとしても西側だと市内業者さんが仰ったそうだが、万一のために。

矢野

付け加えるが、元請さんとの関係で、東側フェンスのほうに重心を向けないよう移植することが前提だった。

参加者 F

中を見たことがないので不安になった。木は活着しているのかなと思うが、根を張っていない状態ということで、取れる対策は取ったほうがいいのかなと。南東の3本に関しては。工事の仕様を教委は出してほしい。伐採計画は2年前くらいに出していて、2022年11月に工事实施計画設計概要が出ている。この中に緑の基本計画に沿った移植計画はあったか？

島崎

移植については3本実施設計の中に入れてある。

F

本移植についての設計は？

島崎

プロジェクトとは協定を結んでおり、本移植については今後の協議。いま仮移植してもらっている場所は緑道部分の外構工事に入る場所。仮移植樹木を現在の場所に置けるのは新校舎ができるまでの期間に限定されている。

説明員 橋本（教育委員会 部長）

安全に関してご不安は大きいのかと思うが、数値化は難しい。できることをプロジェクトと相談しながらやっていきたい。一方で管理していかないと、葉が生い茂ってくると重心バランスにも影響する。ロープで吊ることも工事の元請け業者さんから提案されている。何らかの対策をとってもらうことをプロジェクトに相談する。

参加者 G

そんな余地があるなら撤去が一番いいと思う。桜を守ることに反対はしないが、安全に不安がある以上は。当然二小の校庭に戻るのだらうと思っていたが、まだ決まっていなかったら。再移植した後も大丈夫なのか？ 樹齢もいつている。孫たちに危険だから近づいてはダメなんて言えない。お別れ会もしたのに、なんで急に？ ボランティアの方から2時間水をジャージャー撒くと聞いたが、水道代は按分されてプロジェクトが払っているのか？

橋本

二小の改築計画については議会の承認も得て契約も済み、粛々とやっていくと決まっていた。その中で市民活動の延長線上でこの話が出てきた。緑を守るという理念はみなさん一定程度共通しているということで、やっていただくのもいいのではないかと、と、工事に支障がないことなど条件を整理して協定を結ばせていただいた。水道代に関しては按分というのは難しく、二小の水道代から出させていただいている。

G

プロジェクトが解散した後の責任は市教委に移るのか。

島崎

仮移植の段階においてはプロジェクトに責任を持っていただく。本移植については責任の所在を含め協議を進めていく。市には管理者としての責任があると考えている。

D

教委が主になって矢野さんのノウハウを伺って2度目の杭がどの程度効力を発揮するのか、評価して出してもらって、移植を持続するのが大事。私はこの件で陳情を出した。99.9%大丈夫だと思うが、万一事故が起きた時の責任はどこが持つのかを問うたが、議員の多くは市が持つべきだろうと。先日も連絡をもらい、市が責任を持つ方向で検討していると聞いたが。

島崎

学校敷地内で発生した事故により第三者に損害が生じた場合には、国立市には管理者としての責任があると認識している。

参加者 H

第1回目の説明会と認識している。平日夜で出られなかった保護者もいる。資料、記録、保護者に出してほしい。南東の角については既存木が存在しておらず、一時的な仮置きではなく一年半もの間置かれる。保護者及び近隣住民への情報公開の予定を聞きたい。業者から一本道路側に傾いた木があるとも聞いたが。

橋本

資料、記録の公表について持ち帰って検討する。

【後日追記】市ホームページに説明会当日の配布資料、説明内容、議事録を公表いたしました。また、学校メールにて保護者の皆さまにもお知らせいたします。

島崎

一本道路側に向いた木は重心が校庭側に向いた木と支え合っている。7月23日に筋交を追加し、補強している。

H

南側通学路も迂回できる情報を保護者に出してほしい。

橋本

2学期に入る前にわかりやすい情報を出していく。

【後日追記】令和5（2023）年8月28日に学校メールにより、保護者の判断により通学路の迂回をしていただける旨を周知しました。（ご希望される場合には担任の先生にご連絡ください。）なお、同様の内容を市ホームページにも掲載しております。

C

一番あり得るのは、土留の崩壊。校舎側に嵩上げしているため、道路側に崩れてくるリスクがある。ちゃんと確認しているか。

矢野

元請業者さん含めて確認しているつもり。

橋本

それについても我々としても確認していきたい。

【後日追記】敷地東側の土留めの状態については教育委員会においても確認しており、仮移植樹木を敷地東側に置いたことによる変化はないと認識しています。引き続き、定期的な確認等を行ってまいります。

前田

今日の説明会は安全かどうかを聞きたくていらした方だけでなく、何が起こったのか知りたい方もいらしているのでは。今回、木の伐採を子どもたちが知ったのはかなり最近のことで、保護者の中にも知らない方が多い中、なんとか残したいという声が上がって、元請業者さんもかなり無理をして3m×43mを提供してくださった。教委も、1本でも2本でも残したい気持ちは同じ、ということで、プロジェクト・チームを急遽結成して進めてきた。100%安全とは言えないが、矢野さんの実績、もっと高い木を移植し、一本も倒れていないことを見て信頼を置いている。4日間で40本。見落とされた1本を除いて他の木は全て伐採されずに残った。ここに集まられた方はみなさん不安を感じていらっしゃるのか。

F

2学期が始まるので、いまの段階での対応を聞きたい。誰に決定権があり、いつまでに報告がなされるのか。子どもたちの通学路に関しては変えればいい。でも地域の方は？ 数%でも倒れる可能性があるのであれば、きちんとした説明がなされるべき。

前田

私たちは倒れるとは思っていない。4日間に集まってくださった一日あたり50人の方のうち40人は本業で造園をやっていらっしゃる方。木々は横につながっており、相当のことがない限り倒れるとは思えない。

押田

我々は倒れるとは思っていないが、そういう不安の声があるのであれば、新学期までにもう一度やれることをやらせていただければ。

橋本

我々もしっかりと二小を管理している業者とも意見交換し、2学期が始まるまでを一つの目安としてやらせていただきたい。また、何らかの発信をさせていただきたい。

【後日追記】

令和5（2023）年8月30日にみらいの杜プロジェクト様により、ご心配の声をいただいている南側仮移植樹木を含む樹高の高い木等に、仮移植樹木の高所から校庭側に向けてワイヤー等を設置する安全対策の補強を行っていただきました。

参加者 I

木に対するプロジェクトの方の思いはわかったが、第一に子どもたちの安全を考えてほしい。今日の話聞いても不安になった。子どもたちは工事で不憫な生活を送っている。通学路まで迂回して時間をかけるのはかわいそう。南東の角の一番危ないものはどこかに移動させることがベストだと思う。市教委とやり取りすると、責任の所在が曖昧で不明確。プロジェクトに任せるのではなく、もっとしっかり対策をとってほしい。説明も必要。改築にあたっては何度も説明を受け、伐採のことも知っている。子どもたちも伐採されてチップになることを知っていたのに、木がまたある、ということになっている。その辺ももう少し説明してもらえるといい。

前田

いただいたご意見は一つ一つ教委とプロジェクトと大地の再生の方々とで共有し、できる限りの対応をさせていただきたい。みなさんのご不安が払拭できるよう、全力で対応していく。

説明員 緒方（プロジェクト水撒き担当）

少し安全材料になるかと思うので、東側フェンスはいま内側に引っ張るワイヤーで固定されていることを伝えたい。水撒きは毎日16時から17時の間に、コーンを立てて短時間、樹木の様子をみて表層と根鉢の状態を確認し、必要と思われるだけの水をやっている。ボランティアで水撒きに参加してくださる方は避暑地に來たみたい、と。蟬のぬけ殻もたくさん。あんなに掘り起こさ

れたのに生きて、羽化した蟬たち。子どもたちにこういうことを伝えたいと言いながらやっている。

前田

なぜ学校に木があるのか。子どもたちは一本一本の木を大事に思って、この木が残った、と喜んでくれた。手伝ってくれる子もいた。私たちは子どもたちが喜んでくれることが何より嬉しいし、フルインクルーシブ教育を掲げ、東大とも協定を結んだ教委だからこそ、私たちとも協定を結んでくれたとも思っている。インクルーシブというのは人間だけじゃなく、樹木も生きものたちも一緒に育つこと。それを大事にしてくださったからだと。平日夜以外でも改めてこういう機会を持ちたいので、また是非ご出席をお願いします。